スカ法」（Kansas-Nebraska Act）を成立させ、新テリトリーの奴隷州化へ道を開いた。連邦規模での南北の対決は、こうして日増しに不可避の情勢となっていった。そのなかで、五二年に奴隷たちの惨状を描いたストウ夫人（Harriet Beecher Stowe, 1811-1896）の『アンクル・トムの小屋』（*Uncle Tom's Cabin*）が出版されると、即時廃止論の声は急激に高まった。教会もまた奴隷制をめぐって北部と南部で鋭く意見が対立し、メソジスト教会は四四年に、バプテスト教会は四五年に、長老派も五七年に分裂してしまった。ただし、会衆派とユニテリアンやユニヴァーサリストは北部に集中局在してほとんどが反対派であったため、またクエーカーは南北いずこにあっても奴隷制に反対していたため、分裂することはなかった。

3　民の父リンカン

六〇年の大統領選挙で結成直後の共和党から出馬したリンカン（Abraham Lincoln, 1809-1865）が当選すると、南部は南カロライナ州にはじまって一一州が連邦離脱を宣言し、これを合衆国への叛逆行為とみなした連邦と内戦状態に入った。戦争が始まると、北軍も南軍もそれぞれの教会から従軍牧師を求め、各教派もこれに協力した。北メソジスト教会だけで五百名、南メソジスト教会が二百名、聖公会が百名の牧師を前線や病院に送り、兵士たちの魂の看取りにあたった。北部では特に、ロンドンで始まり当時アメリカにもニューヨークを中心として広まりつつあったＹＭＣＡ運動から、「キリスト教救援会」（The Christian Commission）が組織された。志願した奉仕

者たちは、戦場のチャプレンたちを助け、聖書や伝道文書などを配布し、兵士たちと家族との連絡などを受け持った。また、ユニテリアン教会を背景に組織された「衛生救援会」（The Sanitary Commission）も、同様の働きを医療面で積極的に展開した。

政府は、困難な陸海の戦線をよく指揮したばかりでなく、国内の経済や財政にも将来の発展の基礎を与え、英仏など国外勢力の干渉を未然に防ぎ、戦局の有利を見届けた上で、六三年元日をもって「奴隷解放」を宣言した。しかしリンカン自身は、六五年の南軍降伏六日後に暗殺された。死のひと月前になされた彼の大統領再選就任演説では、六〇万という米国史上最多の戦死者を前にして、この戦争の神義論的な意味が問われている。南北両軍は、同じ神に祈り、同じ神に助力を求めて得ることができなかった。それは、神が人間の思惑を越えたご自身の目的をもち給うことを示している、というのがリンカンの認識であった。彼にとってこの戦争は、奴隷制という歴史的な悪に対し、南北を問わずアメリカ連邦全体に下された神の審きであった。奴隷制は、非人間的で悲惨であるばかりでなく、何よりもアメリカという共和国の理念に矛盾し聖書に悖る罪なのである。リンカンは特定教会との結びつきをもたなかったが、その信仰は深く聖書に培われており、血の贖罪を語った直後にみずからも暗殺されて犠牲となったことから、「エイブラハム」（民の父）というその名の通り、アメリカ史に欠くことのできない範例的な指導者像となった。

囲み記事4　リンカン「第二次大統領就任演説」（一八六五年三月四日）よりの抜粋

両者〔南北〕とも戦争が現在のように拡大し継続するとは予期しませんでした。この戦いの終結とともに、あるいはそれ以前に、この戦いの原因となったものが消滅しようとは、両者とも予測していませんでした。各々もっと容易な勝利を予期していたのでありまして、またこれほど重大なまた驚くべき結果が生じようとは思っていませんでした。両者とも同じ聖書を読み、同じ神に祈り、そして各々敵に打ち勝つため、神の助力を求めています。他人が額に汗してえたパン（創世記3・19）を奪おうとして正義の神の援助を求める人があるということは、不可思議に思えるでありましょう。しかしわれわれ自らが裁かれないように、他を裁くことをやめましょう（マタイ伝7・1）。両者の祈りが双方ともききとどけられるということはありえませんでした。彼の祈りもわれの祈りもそのままにはききとどけられませんでした。

全能の神は彼自らの目的を持ち給います。「この世は躓物（つまずき）あるによりて禍害（わざわい）なるかな。躓物は必ず来たらん。されど躓物を来たらす人は禍害なるかな。」（マタイ伝18・7）もしもわれわれが、アメリカの奴隷制度は神の摂理により当然来たるべきつまずきの一つであり、神の定め給うた期間続いて来たものであるが、今や神はこれを除くことを欲し給うのであると考え、また神はつまずきを来たらせた者の当然受くべきわざわいとして、北部と南部とに、この恐しい戦争を与え給うたのであると考えるとしますと、それは活ける神を信ずる者が当然持ってもよい考えではないでしょうか。われわれがひたすら望み、切に祈るところは、この戦争という強大な苦〔天からの惨禍〕が速やかに過ぎ去らんことであります。しかし、もし神の意思が、奴隷

の二五〇年にわたる報いられざる苦役によって蓄積されたすべての富が絶滅されるまで、また苦によって流された血の一滴一滴に対して、剣によって流される血の償いがなされるまで、この戦争が続くことにあるならば、三千年前にいわれたごとく、今なお、〔われわれも〕「主のさばきは真実にしてことごとく正し」（詩編19・9）といわなければなりません。

なんぴとに対しても悪意をいだかず、すべての人に慈愛をもって、神がわれらに示し給う正義に堅く立ち、われらの着手した事業を完成するために、努力をいたそうではありませんか。国民の創痍を包み、戦闘に加わり斃れた者、その寡婦、その孤児を援助し、いたわるために、わが国民の内に、またすべての諸国民との間に、正しい恒久的な平和をもたらし、これを助長するために、あらゆる努力をいたそうではありませんか。

出典：『リンカーン演説集』高木八尺・斎藤光訳、岩波文庫、一九五七年、一五五～一五六頁

リンカンは、演説の数日後、手紙に次のように記している。「私はそれがただちに歓迎されるとは思いません。人々は神と彼ら自身との間に目的の相違があったということを示されて喜ぶものではありません。しかしこの場合その事実を否認することは、世界を支配する神がいますということを否定するに同じと思います」（同書「解説」より引用）。彼はその数週間後の四月一四日に暗殺された。

4　女性の権利を求めて

信仰復興は、魂の救済ばかりでなく、社会改革への取り組みの必要性にも人々を目覚めさせた。奴隷廃止運動の端緒は独立革命前に遡るが、それがアメリカ社会全体に波及する力をもつようになったのは第二次信仰復興運動後のことである。そしてこの運動には、はじめから多くの優れた女性がかかわっていた。グリムケ姉妹（Sarah and Angelina Grimke, 1792-1873; 1805-1879）はその一例である。南カロライナ州のプランテーションで育ち、奴隷たちの惨状を幼いときから見ていた彼女らは、長じてクエーカーの信仰に触れ、講演や著述などで奴隷解放を熱心に論ずるようになった。彼女らにとり、奴隷制度は黒人だけの問題ではなく、女性の問題でもあった。夫たちが結婚関係をないがしろにして黒人女性に子どもを産ませるからである。女性が公の場で発言することだけでも問題視された時代に、その発言でこのような主題に触れるには相当の覚悟が必要だったことであろう。彼らの確信は聖霊の光によって直接に聖書の言葉を解釈するというクエーカーの信仰に深く根ざしていたが、その発言はクエーカーの仲間にも咎められるほど大胆であった。『両性の平等についての書簡』（*Letters on the Equality of the Sexes*, 1837）では、聖書に基づき、「女性や男性の権利」ではなく「人間の権利」を求める、という主張がなされている。

そのグリムケ姉妹に触発されて、スタントンとモット（Lucretia Mott, 1793-1880）は一八四八年にニューヨークのセネカ・フォールズ（Seneca Falls）で最初の女性権利大会を開いた。この会

議は、フェミニスト運動のもっとも重要な歴史的里程の一つである。スタントンはそこでアメリカの「独立宣言」をなぞった「心情宣言」（The Declaration of Sentiments）を公表し、会議に出席した男女百人の署名を得た。この宣言は、「すべて男と女は平等に造られている」という一文に始まり、「独立宣言」におけるイギリス王の専横ぶりを男性一般の専横ぶりに置き換えて非難した上で、かくして女性の独立はアメリカの独立と同じく天賦の権利である、と論じている。宣言の採択に際しては、女性の参政権についてだけ賛否が分かれた。出席者の多数を占めていたクエーカーは、その信念により男性でも一般の選挙で投票をしなかったからである。最終的には、列席していた元奴隷で解放運動の論客ダグラス（Frederick Douglass, 1817-1895）の雄弁により、これも可決されている。

五一年のオハイオ州エクロンで行われた次の女性権利大会では、元奴隷の女性トゥルース（Sojourner Truth, 1797?-1883）が眉をひそめる白人男女の列席者の前に立ち、聖書の記事を引きつつ、みずからの苦難の生涯から女性の強さを堂々と語って満場の喝采を浴びた（囲み記事5参照）。なお、スタントンは晩年、聖書のうちに女性差別の根源を摘発し平等思想を基礎づけるために、『女性の聖書』（*The Woman's Bible*, 1895, 1898）を共同執筆している。

以上の経緯からも明らかなように、奴隷廃止運動と女権拡張運動とは、はじめは共通の課題として認識され、共通の活動家によって担われてきた。女性は奴隷と同様に法的人格を認められず、名前も財産も親権も教育も職業ももつことができない劣位の存在とされていたからである。女性

図20：ソジョナー・トゥルース
「わたしは実体を支えるために影を売る」と書かれてある。米国議会図書館蔵
Courtesy of the Library of Congress, Prints & Photographs Division, LC-USZ62-119343.

ちのために活動する必要のあることを学んでいった。南北戦争後の一八七〇年に憲法修正第一五条で黒人男性にも選挙権が与えられると、その彼らのために労してきた自分たちが未だ何の権利ももたないという現状に、女性たちはいっそうの矛盾を感じるようになる。

女性参政権を求める運動の先頭に立ったのは、スタントンの朋友アンソニーであった。彼女もスタントンと知り合う前は、モットと同じくクエーカーの信仰から奴隷制廃止や禁酒運動に取り組んでいた。二人の立場を比べてみると、スタントンは参政権より包括的な平等の権利を求めており、精神的な独立が果たされない限り、女性は差別を克服できないと考えていたのに対し、アたちはしかし、モットが経験せねばならなかったように、奴隷制廃止を訴えて国内外の会議に出席しながら、男性たちの前で公に発言することも許されなかった。彼女らはこの現実に直面し、黒人のためばかりでなく自分た

ンソニーはより実際的で、女性が政治上の権利を十分に行使できるようになればおのずと宗教的な差別も解消する、と考えていたようである。しかし、二人の存命中にその努力は実らず、女性に選挙権が与えられたのは、ようやく一九二〇年の憲法修正第一九条においてである。この条項は、彼女の名を冠して「アンソニー修正」（Anthony Amendment）と呼ばれている。

囲み記事5　トゥルースの演説

ソジョナー・トゥルースは、ニューヨーク州のオランダ系地主の奴隷に生まれ、イザベラという名であった。別の家に売られて転々とし、一八二六年の同州奴隷制全廃を前に逃亡、篤志家に買われて自由の身となった。その後信仰復興運動に触れて、アフリカン・メソジスト監督シオン教会の一員となる。「寄留者・真理」という名は、四六歳でみずからも巡回説教者になる決意をしたときに、自分で選んだものである。やがて上述のギャリソンやダグラスとも親交をもち、共に各地を講演して回るようになった。以下は一八五一年の講演の一部である。

あそこにいる紳士は、女が馬車に乗るときは手を貸してやらねばならん、溝をわたるときは抱き上げてやらねばならん、座るときはどこでもいちばんの上席に座らせてやらねばならん、と言っておられる。だけど、誰も一度だってわたしにそんなことをしてくれた人はいない。それでもわたしは女なのだ！　わたしをごらんなさい。わたしのこの腕をごらん！　わたしは耕し、植え、刈り集め、納屋に納めて働いてきた。男は誰もわたしにかなわなかったよ。それで

もわたしは女なのだ！　わたしは男と同じだけ働けるし、男と同じだけ食べられる――食べる物があればの話だが。鞭だって男と同じだけ耐えられる。それでもわたしは女なのだ！
わたしは十三人の子を産んだけれど、みんな奴隷に売られてしまうのを見ている他なかった。そしてわたしが母の嘆きを叫んだときには、イエスさま以外に、誰も耳を傾けてくれなかった。それでもわたしは女なのだ！……あそこにいる黒服の小柄な紳士は、キリストは女ではなかったから、女は男と同じだけの権利をもたないのだ、とおっしゃる。それでは聞くがね、そのあんたのキリストさんはどこから来たのかね？　神さまと女からだよ！　男は何のかかわりもなかったんだ。……もし神さまがお造りになった最初の女がたった一人で世界をひっくり返すほど強かったのなら、ここにいる女たちで力を合わせれば、それを元に戻してまっとうな世界に直してやることだってできるはずだ！

出典：Elizabeth Frost and Kathryn Cullen-DuPont, eds., *Women's Suffrage in America: An Eyewitness History* (New York: FactsOnFile, 1992), 104-105.

第10章　アメリカの膨張

◆関連年表

一八五三年	ペリーが日本へ派遣される
一八五九年	ブラウンやヘボンら宣教師が日本へ派遣される
一八六二年	「開拓地無償給付法」が制定される
一八七〇年	「米国有色人メソジスト監督教会」成立
一八七三年	ムーディとサンキーがイギリスへ伝道に赴く
一八八〇年	「救世軍」の活動がアメリカで開始される
一八八五年	ストロングが『われらの国』を出版
一八八九年	カーネギーが『富の福音』を出版
一八九〇年	国勢調査でフロンティアの消滅が確認される
一八九五年	「全米バプテスト連合」成立
一八九六年	連邦最高裁判所が「人種隔離政策」を支持
一九一〇年	エディンバラで「世界宣教会議」開催

1　再建時代と残る差別

南北戦争は、米国史上最大の犠牲者を出して終わった。その後南部諸州が連邦に復帰し、連邦軍による治安維持が終了する七七年までを「再建時代」（Reconstruction Era）と呼ぶ。この頃、